

「幸福実感都市あらかわ」の実現を目指して

荒川区民総幸福度と「幸せリーグ」



災害に強い街

「これは荒川区のイメージが変わるね」

二男三くんは、荒川区の汐入地区を訪れていました。ここは戦後、狭く入り組んだ路地に木造家屋が密集した街でした。1987(昭和62)年、国土交通省と東京都が再開発事業に着手し、スーパー堤防に守られた災害に強い街に生まれ変わりました。

都立汐入公園は、荒川区内で最も広い公園で、災害時には約12万人を収容する広域避難場所となります。

高層の集合住宅、美しい緑と水辺、これからの都市のモデルと言える街並みです。二男三くんにとって荒川区のイメージは、昔ながらの街並みが残る下町。大きく様変わりした汐入

地区には目を丸くして驚いています。

「荒川区が今までどのような発展してきたのか、これからどんな街をつくっていくのか、調べてみよう」

二男三くんはさっそく、2017(平成29)年3月に開設し、図書館、吉村昭記念文学館、子ども施設の各機能が融合した、あらゆる世代が活用できる施設「ゆいの森あらかわ」に向かいました。

大規模開発が人口増加を押し上げ

二男三くんは「ゆいの森あらかわ」で、『荒川区人口ビジョン』と『荒川区しごと・ひと・まち創生総合戦略』を借りました。

まず2016(平成28)年3月に策定された『人口ビジョン』から読

み始めました。

荒川区の総人口の推移を見ると、1998(平成10)年を底に人口減少から増加に転じ、毎年千人以上の増加が続いており、2015(平成

27)年1月1日現在の総人口は20万9087人となっています。

地区別に見ると、1998(平成10)年頃から全ての地区で概ね増加傾向となっています。中でも、南千住の汐入地域で行われた大規模開発の影響もあり、南千住地区で大幅な人口増加が見られます。

人口動態の推移を見ると、自然動態は1989(平成元)年にプラスからマイナスに転じ、一方の社会動態は1998(平成10)年にマイナスからプラスに転じています。このことから、近年の荒川区の人口増は、転入者の増加によりもたらされていることが分かります。

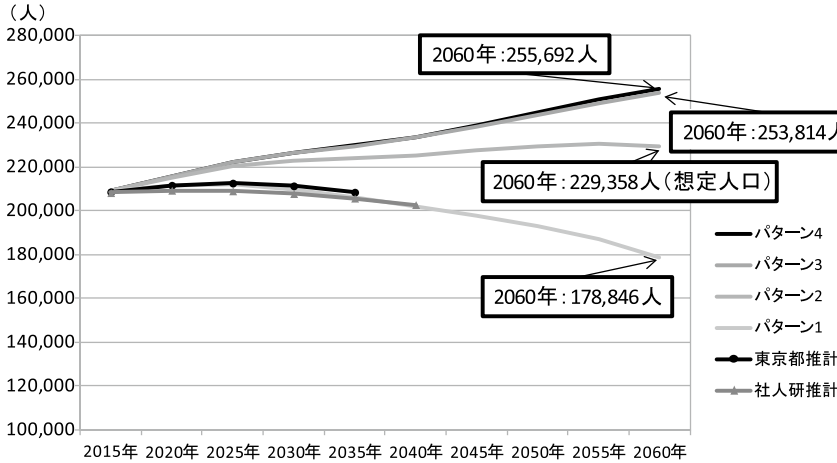
こうした大規模開発を始め、各地域におけるマンション建設等が荒川区への転入者を増加させ、人口動態



あらゆる世代が活用できる複合施設「ゆいの森あらかわ」



荒川区の将来人口推計（総人口：2060年まで）



全体を増加に押し上げていることがうかがえます。
『人口ビジョン』では、荒川区の現状と課題について、①高齢化の進行②出生率の低下③人口の流動性の高さの三つをあげています。その上で、今後目指すべき方向性として、「出生率の向上」と「定住化の促進」を掲げています。

荒川区の将来人口推計

将来人口推計では、現状から出生率や人口の定住率に特段の変化がなく、現状のままで時間が経過した場合を想定した「パターン1」に加え、合計特殊出生率が全国平均レベルまで向上し、転入がパターン1よりも増加した場合を想定した「パターン2」、合計特殊出生率が、東京都が掲げる「希望出生率」の数値まで向上した場合を想定した「パターン3」、合計特殊出生率が、国が掲げる「希望出生率」の数値まで向上した場合を想定した「パターン4」を設定しています。

すると、パターン1では、荒川区の人口は何も対策を講じなければ2025〜2030年頃をピークとして2060年には18万人弱まで減少する可能性があるかと推定しています。一方、パターン2、3、4は、2060年時点でそれぞれ、22万9358人、25万3814人、25万5692人と推計しています。荒川区では、パターン2の人口規模を想定人口とし、現時点では区全体の人口は概ねパターン2の通り推移

4つの基本目標

「総合戦略」では、今後の荒川区が持続可能で活力ある地域社会を築いていくために目指すべき将来の方向性として、人口ビジョンで示す「出生率の向上」「定住化の促進」の二つに加えて、「交流機会の拡大」を示しています。その上で、四つの基本目標を掲げています。

「地域経済の活性化と就労の促進を図る」では、魅力あふれる下町の商店街やモノづくり企業への支援などを行い、地域経済の活性化、雇用創出を図るとともに、就労を希望する区民が最適な職を得られるよう支援するとしています。あわせて、訪れた人が「また行きたいまち」と感じるような荒川区の更なるイメージ向上を図るとしています。

「若い世代の出産・子育ての希望をかなえる」では、若年世代が子どもを産み育てやすく、出産・子育てに幸せを実感できる地域づくりに向

け、保育所待機児童の解消、雇用確保、子育てに関する切れ目ない支援、ワーク・ライフ・バランスの実現、教育の充実等の環境整備を推進するとしています。

「人と人がつながり、安全・安心で住みやすいまちをつくる」では、荒川区で生まれ育った人も転入してきた人も、地域とのつながりを持ち、安全・安心を実感し、今後も住み続けたいと思うまちづくりを進めるとしています。

「全国の自治体とプラスサムの関係を構築する」では、全国の自治体が密接に連携・協力し合い、互いの良い部分を活かして共に発展していく「プラスサム」の関係を構築し、荒川区と全国各地域が共に栄える将来を目指すとしています。

さらに二男くんは、具体的な取り組みを調べてみることにしました。

全国に先駆けた荒川区民総幸福度指標

荒川区では、「区政は区民を幸せにするシステムである」というドメイン（事業領域）の下、「幸福実感都市あらかわ」の実現を目指して、

全ての区民の幸福実感をより一層高めるため、全国に先駆けて荒川区民総幸福度（GAH）に関する取り組みを進めています。

区民の幸福度を測る指標の測定分析を通じて、区民の幸福実感上の課題や地域において起きている課題を把握することにより、行政行動のターゲットを明確化し、幸福度向上のための最適な政策・施策・事務事業を実施しています。

荒川区民総幸福度（GAH）指標は、46の項目からなっています。指標は荒川区基本構想で掲げる「健康・福祉」「子育て・教育」「産業」「環境」「文化」「安全・安心」の六つの都市像に対応した分野ごとに一つの上位指標と6〜8個の下位指標があり、これらを総合する指標として「幸福実感」があります。

区では、区民の幸福度を把握するために毎年区民アンケートを実施しています。区民アンケートでは、実感を「全く感じない」から「大いに感じる」までの5段階で選択してもらい、46の項目ごとに区民全体の実感を1〜5で数値化しています。

区では、こうしたGAH指標を荒

川区基本計画に指標として反映し、分析することで、今より幸福を感じられるようになるには何が必要か、区民とともに地域の課題を解決するにはどのようにすれば良いのかを考えています。

健康寿命を伸ばす取り組み

荒川区では、誰もが健康で生き生きと暮らせる「生涯健康都市あらかわ」の実現に向けて、2005（平成17）年に「生涯健康都市」の宣言を行い、区民の健康増進に積極的に取り組んでいます。そうしたことから

ヘルシーな食生活につながる「あらかわ満点メニュー」



区独自の健康づくり体操「ころばん体操」で介護予防

からも今回の幸福度調査では「健康・福祉」の指標の実感度が最も「幸福実感」との相関が高いという結果が出ています。

具体的な事業として、「あらかわ満点メニュー」は当初、外食の多い働き盛り世代の健康を食生活の面からサポートすることを目的に、区内飲食店と女子栄養大学短期大学部と区が連携して、「安くて・おいしくて・ヘルシー」をコンセプトに開始しました。その後、主食の小盛り対応や塩分少なめのメニュー追加、家庭料理にも応用できる「あらかわ満点メ

ニューレシピ集」の作成等、女性や高齢者にも事業の対象を拡大していきます。

また、「荒川ころばん体操」は、区オリジナルの「健康づくり体操群」の一つで、高齢者の転倒予防を目的として、2002（平成14）年度に区民と首都大学東京と区の連携事業として誕生しました。その後、下肢の体幹の筋力アップのためにセラバンドを活用する「せらばん体操」、車椅子の利用者等のための「ばんざい体操」の開発、全世代向けの「あらかみん体操」（「5分で出来る荒川どこでもみんなでころばん体操」の愛称名）も加わり、絶えず進化を続けています。

働き盛り世代のメタボ対策を応援する「あらかわNO（ノー）！メタボチャレンジャー」事業では、「体重を〇キログラム減らしたい」「若い頃のスカートが履きたい」等の目標を立て、栄養や運動の学習、グループワークやレポート作成、SNSでの情報交換や体験談の共有等を重ねながら、互いに助け合って、自分に合った健康づくり方法を見つけていきます。



防災部の中学生たちがスタッフ役となる防災イベント「あらBOSAI」

「安全・安心」のさらなる向上を目指して

一方、「安全・安心」の各指標の平均実感度は、他の分野と比べて全体的に低い傾向にあり、区民が防災について不安を感じている状況にあります。なかでも、若い世代の「安全・安心」の指標の実感度が低い傾向にあるので、こうした若い世代にも防災について学んでもらう機会をつくるため、「あらBOSAI」という誰もが参加しやすい防災イベントを実施しています。

また、荒川区では2015（平成27）年から区内の全区立中学校に「防災部」を設立し、ジュニア防災リーダーの養成に取り組んでいます。「あらBOSAI」で行われる防災体験プログラムでは、区内の防災部の中学生がスタッフ役となり、磨き上げた防災の技を来場者に披露するなど、区民へ「安全・安心」に関する意識啓発を行っています。

さらに、荒川区は自治会・町内会などの地域コミュニティの活動が盛んであり、これを最大限に生かすことでハード・ソフト両面から災害に強い「安全・安心」な街を目指しています。

幸せリーグで学び合う

こうした区民の幸福度を高める取り組みは、荒川区という一自治体で完結しているものではありません。荒川区は、志を同じくする他の基礎自治体と相互に学び合い、高め合うことを目的として、「幸せリーグ」というネットワークを構築しています。「幸せリーグ」の正式名称は、「住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合」です。これは、住民の幸福



年に一度、全国の基礎自治体の首長が集まる「幸せリーグ」総会

を政策の基本に据えた取り組みをしている、あるいは検討している基礎自治体間の緩やかな連合体です。主な活動として、年に一度、各自治体の首長が集う「幸せリーグ総会」を開催するとともに、各自治体の実務担当者による会議を開催し、政策に関する議論を行っています。

実務者会議は「幸福度調査等の政策反映」や「人口・少子高齢化・雇用問題」などのテーマごとに6つのグループに分かれ、検討を行い、2年に一度その成果を発表します。実務者会議では、参加自治体の職員同

士の交流を図っています

2019（平成31）年4月1日現在、幸せリーグには北海道から九州まで、全国96の市区町村が加入していて、荒川区とは全く環境が異なる自治体も含まれています。実務者会議の各グループには区の職員も入り、参加自治体の職員同士が情報やアイデアの共有を図っています。立場の異なる自治体同士が切磋琢磨して、お互いを高め合い、人材育成の面でも成果をあげています。

二三男くんは「自治体経営に住民の幸せという目標を置いて努力していることが驚きだけれど、同じ志を持った基礎自治体が『幸せリーグ』に集まって、どうしたら住民を幸せにできるのかを研究し、自分の自治体だけでなくお互いにアイデアを共有しようとしているところが素晴らしい。それこそが東京も含めた各地域がウィンウィンの関係を構築することだし、真の地方創生と言える」と熱く語りました。

一通り勉強を終えた二三男くんは、「僕も健康づくりのために満点メニューで腹ごしらえしよう」とラーメンを食べに街に繰り出しました。